





一往



枝林

賴齋主人



題

生和の...  
物の時...  
...  
向...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

得由ある物なり  
午下河段に古蹟の  
ら来りてをその  
しるるは 邦人を  
一二年  
平生は古蹟を  
十表のり  
折に付てら  
表のりたる

悦のあり  
先づし法の中題ハ

毎歳終ハハハハ

摩降所収ハハハ

両宮ハハハ 匡場恒例

今茲十二月ハハハハ

實應賜為私賦経律以紀

息

ハハハハハハハハハハ

今日乃...

...

西月十日

十日廿三日

...

...

...

...

...

...

掃園若人抄

の

百病を治す



安 君相之氣  
森 五之酒陪雙  
歎 五之乃審  
霞 五之乃審  
飛 五之乃審  
成 五之乃審

棟園先生書

見其書中多能而余

為所疑能記已

括之為持

字

表



出抄之字似解  
今抄之字似解  
此台之字似解  
山之字似解  
子之字似解  
後之字似解  
字之字似解  
少之字似解  
深之字似解

張揚子即...  
復了...  
為子...  
...

...

...

...

るをいふは後法を經に  
法御書に當面あるを  
法に當りしもの事には  
其の事も亦あるをいふに  
甘んじしもの事及び

之をいふは其の事  
に當りしもの事  
其の事  
其の事

五三三

書及

くろしきものから  
せしものすけの  
のちのぬす物の  
しつもの

此物之味  
之味  
也

其味  
之味  
也

其味



不之舉  
何者

兩輯  
其者  
向片

日向すし 押ひ得す  
かしの使ひまぢきあす  
再微之志まらとま接  
後まら子 名持縁助  
おのまの事 山まら子  
おまら子  
おのまら子 おまら子  
換 おまら子  
おのまら子 おまら子  
向 おまら子

日 記 一 冊 有 在 矣  
今 存 於 此 處 矣  
如 欲 知 其 詳 者  
請 向 此 處 之 人 問 之  
其 詳 已 然 傳 聞 矣  
其 詳 已 然 傳 聞 矣  
其 詳 已 然 傳 聞 矣  
其 詳 已 然 傳 聞 矣

僕の主人は五世に  
由りて此の子に  
をりて

三つに  
宗の町に  
ありて

久保七郎の  
紹に  
ありて

少の  
ありて

〇 其志を  
収

定稿雅興

郵政報二事  
事多  
未名  
今月初

二日地初申至丑  
或回達三夜此  
未定為後九百  
啼哭十定地  
執事家度到  
望丸家堆念子念  
家富屋子依  
弱婿子遊  
河

中又怕無片石  
出乃應與山崗  
平海和柳河入  
且道多知能通  
大快於屋招小  
付身負釋塵意  
騰躍甚三年  
口愧任一家自

忠孝難全 援手不  
足 履被 踏 架 此  
卷 五 物 恒 度 限 城  
好 空 處 遠 江 都 定  
安 吉 得 無 如 夫 以  
織 民 起 五 條 何  
鐵 扇 有 肉 皮 下 出  
誰 任 然 所 為 亦 否



少春森海首龍吟  
孔秋之愜律心  
長躬強指金

七月九日在廣陽  
所系報大異名  
子能操我枕之心  
此物以遺問

錄

承蒙舊日老友轉錄

京中一從海士心

家子後交之知說

使經下

家書

尾至其少白曰大魚負坤  
坤有神按其旨精名則欺



酒 静 子 氏 御 手 紙  
し 静 子 氏 御 手 紙  
家 の 人 々 子 孫 等  
情 難 事  
お 出 立 者 々 々 々 々  
人 々 々 々 々 々 々 々 々  
山 の 向 通 知 物 々 々  
知 事 々 々 々 々 々 々  
為 事 々 々 々 々 々 々  
此 頃 々 々 々 々 々 々

とては、おのれのまゝ  
かゝるに、いふは、お  
まの心、いふは、お  
おのれ、いふは、お  
おのれ、いふは、お  
おのれ、いふは、お  
おのれ、いふは、お  
おのれ、いふは、お

しはすむる 世もかり  
ゆふ事哉、し あゝと云ふ大へい  
とこ何同あそび  
古のあかひ あゝと云ふ大へい  
とこ何同あそび  
と云ふは あゝと云ふ大へい  
とこ何同あそび  
あゝと云ふ あゝと云ふ大へい  
とこ何同あそび  
あゝと云ふ あゝと云ふ大へい  
とこ何同あそび

あゝと云ふ

跋

人以其衣冠優盛或可以擬其彷彿  
至亂頭粗服酣嬉與斷者則不能  
也賴翁之書於其用意如筆者甚  
多履作蓋所謂正其衣冠者以猶有  
操之可依也而簡牘終筆不以書  
為意者天真爛漫莫影之可捕有  
者不可及者存焉上之好翁書者固  
知其所言者之所貴重而未知天真  
之妙及在其縱筆一者是積書生  
主人之所以有此刻也嗚呼此帖於  
吾師持翔霄翥鳳之一毛羽耳

然後句以澄復字片言情文得是  
與彼尋常寒暄徒使愛語之用  
者不同其科則主人以舉又安知  
非揭以其墨妙而已也哉遂贊一  
言於其尾

嘉永二年清和月百筆致執謹  
題于平安湯居之有外霞





山陽先生墨帖目次

玄雲閣摹刻

連雲帖 清人題字

酒茶聯字 一雙

詠古絕句帖

蒙古來詩帖

吉田驛詩帖

後赤壁賦帖

金剛山懷古詩帖

手簡帖

第一集 既刻

三集 嗣出

此書山陽先生交遊中へ應酬セラレシ書翰ノ文采俊逸ナルモノヲ輯ムソノ書尤飛動シテ真率不用意ノ妙アルハ固リ言ヲ待カ且ツ文章大家少ノ餘カラ用テ綴シテ故ニ往々詩文ノ法ハラ悟入スベキモノトシテ上風流家書通口氣ノ使ヒ様ヲモ學ブヘシ故ニ尺牘俗文ニ拘ラズ退々上刻シテ之ヲ世ニ弘ムト云

雙鉤併刻河津祐度

嘉永二年己酉夏月

江戸

須原茂兵衛

大坂

柳原喜兵衛

石田和助

京都

若山茂助

吉田治兵衛

